

會



報

1966年11月

257

日本山岳会

ことしの正月、イタリア山岳会会報編集者ベルトリオ氏から次のような珍しい手紙がといた。

『一九六六年の初頭にあたり、貴下と日本山岳会に対し親愛なるお慶びをおくります。私はいつも諸方面における日本登山家の活動をフォローしており、かれらのみならずの成功をお祝いいたします。』

さてたいへん珍しい本について、出来ればご説明を願いたい。この本は私がイタリア山岳会の図書室で見つけたものですが、ギド・レイがどうかして所蔵していたものを寄贈したものです。この本は二冊に製本され、和紙に印刷されて横一八・五センチ縦二五・五センチです。第一巻は三四四と本文三枚、第二巻は三〇〇図だけです。

ギド・レイ旧蔵

の

日本名山図会

日高信六郎

私はこの本をトリノにあるサレジオ派の学校に在学中の中国人と日本人に調べてもらいました。この本は図書室で「シナの本」の表題の下に分類されていました。二人の学生（登山家）はあまりません。これを調べたのち、書体が現代的でないから正確な翻訳が出来ないと云い、主な部分を大抵つぎの様に訳しました。

著者はナンブガワ・モトヨシ、メイザンツ（有名な山々の図）。一発行者はスバラヤ・シゲヘー（一八六四年—日本、江戸、日本橋一丁目）。

著者は序文の中で、山を征服する楽しさと難しさを知っているすべての人々に、より遠くより名高い山々の姿を伝えようと欲するのだと書いている。著書はまたこの本を一八〇四年に書き、ここに画かれた山々の少くとも半分は友人のタニ・フミと登った。絵図はチェン・チン（鄭虔）とリー（李）によって描かれた。書中にはまたパロン・カワムラ・ヒロシの証言があり、図が正確を欠くという人たちの意見に反対して、これらの図が正確なことを親しく確かめたと書いている。

これらの図（明らかに木版刷り）を調べた両学生は、上記の理由によって、一々の図に添えられた山名を訳すことを敢てしませんでした。そこで私にとつての問題は次の通りです。

この本は世に知られているか？
この本は山岳について先駆者の探究としての価値をもっているか？
これらの山はシナか日本か？
もしこの本が日本で有名な山々、一々の図についている文字の翻訳が得られるか？ 或は貴下に図の写しを送ればそれが得られるか？
本としての価値があるのか？
著者の生涯について何か知られているか？

私が貴下に呈した質問について悪く取らないで下さい。本件について何かお知らせ下さることが出来たら大へんありがたいです。

この手紙を読んだだけでそれが谷文晁の日本名山図会を指すものであることはすぐわかった。手もとの原本を見たり、鳥水の『優松の句ひ』（谷文晁の日本名山図会）を参照して大体の見当はついたが、さらに会員小林義正さんの懇切精敏な御示教によってハッキリした返事が出来るようになった。おまけにルームでこの話を聞かれた足

立源一郎さんは愛蔵の日本名山図会三巻を惜し気もなく提供して、イタリア山岳会に寄贈方を申出られたのは重ね重ねありがたく、御両君に対して深くお礼を申し上げる次第である。

かくして返書は九月に入ってやっと出荷の運びになった。寄贈本は専門家の手によって虫喰い部分を裏うちし、綴じ糸も表紙も新しい装いをこらして旅立った。

尚先方の注文に応じて各図にわたり山名と国名をローマ字にした表を添えた。これも小林氏を煩わした。

ギド・レイが東洋の文物に興味を抱き、相当のコレクションを所蔵していたことは知られているが、こんな珍しい本をいつ、どうして手に入れたかベルトリオ氏も知らないとい書いているが、大いに知り度いところだから、この上にも調べてわかったら知らせてほしいと頼んでおいた。

先方所蔵の二冊目は来翰のくわしい説明によって二冊目が原本の人（第三巻）二冊目が地（第二巻）にあたり、天（第一巻）は欠けていることがわかった。

書名について来翰には「名山図」となっているから一見「名山図譜」文化元年（一八〇四年）初版）のように解せられるが、先方所蔵本一冊目（原本第三巻）の図版数三四という点から見ればこれは初版に磐手山、玉東山の二図を追加した後版すなわち「日本名山図会」に違いない。先方では原本第一巻（天）が欠けているため、その表紙裏に記載の題名がわからず、第三巻（人）末の川村博の跋文冒頭に「向者家君之輯名山図云々」とあるところからそう記したのと思われる。来翰に出版の年を一八六四としてあるのは一八〇四のタイプ誤りだろう。これは初版の年である。

これで先方の疑問が解け、三冊完備

の名山図会がイタリア山岳会図書室の「日本の山」の部にレイ旧蔵の二冊と並んで、日伊両山岳会のシンボルとして収まることになったのはお目出度い次第である。

この本の解説を頼まれた日華両学生の当惑と苦心は察するに余りあるが、合作の成果には微苦笑ものが相当ある。

目次

随筆研究

ギド・レイ旧蔵、日本名山図会

白馬岳初期登山者その他（Ⅲ）

追員の銀光Ⅱ 武田久吉 二

会員の声 初見一雄 三

（山岳は？ 会報の将来・会費） 三

海外資料 アルゼンチンの二山岳団体 五

ベルギーの荷物運搬料 六

会員岳友通信 ベナンより・N・Bクリンチに 六

遭遇・ツェルマット便り・日・ 六

図書紹介 グ友好隊便り 九

会務報告 二〇

会員異動 二〇

新入会員 二一

の表題と書肆千鐘房の広告文の外、紫栗山の叙と文晁の識語を載せてあるから、これがあつた、誤解を起すこともなかったろうが、同時に両学生の苦悩を増すことになったろうと想像される。

著者のナンブガワ・モトヨシは第三巻跋文末尾の南部・川（村）元善であつて、錦城と号し南部に在の好事家愛山家の医師、文晁に本書を描かせた人

である。表紙裏には江戸谷文晁先生著全三冊となつてゐる。発行書林の須原屋茂兵衛のスパラヤ・シゲヘイはスパラヤ・モヘイが正しく(書名については前記の通り)第三巻々末にある錦城の息子の識言には文晁が弟元且の写生に拠つて描いた磐手山は郡山からの所見で南部の人はその真なるを疑うものがあるから、改めて南部から望んだものを描かせたとあるのを誤訳した上、男・川村博をバロン・カワムラ・ヒロシとしたのは愛嬌である。

最後の錦城の跋文は私にもよく読みこなせないが、筆者がじぶんの登山経歴は僅かに十中五六を得たのみと云うのを、本書所載の山々の少くとも半分は登つてゐると称したのはまあよいとしても、畏谷文晁の山水画才を推賞して華人の画家に比してゐるのを、友人タニ・フミと山に登つたことを、すべての絵図は華人画家(鄭度俊と李)が描いたと断定したのは中国学生的身びいきによる日本語漢文の誤訳とでも評しようか。

“The Day the Rope Broke”, by Ronald W. Clark

マ・セラの伝記の書いてある“*The Splendid Hills*”と“*The Victorian Mountaineers*”, *A Picture History of Mountaineering*”その他半ダース以上の本を出しているクラークが、今度は「綱の切れた日」(マッターホルン初登攀物語)という二二二頁のものを上梓した。ウィンバーのことが中心になつてゐるが、まだまだわからないことが沢山あつて話題はつきない。いずれ何処かに紹介しよう。(I・Y)

白馬岳初期登山者・その他

吉田久武

二十六日、夜来の雨やまず、風は依然強く吹いてゐたが、八時頃から雨は収まり、濃霧となり、西風が盛に霧を飛ばして居た。午後三時半頃、村役場からの荷下げ人夫三名到着。聞けば三名の募集に對して、百名の応募者があり、抽籤によつて定めたが、結局山に慣れない当選者は、山慣れた者に権利を譲るという有様であつたといふ。三名の中只一人は、山稜上から越中の國を覗いて見たので志望したといふ篤志家であつた。この日の午後五時頃西の大風が吹いたが、風は東に変わったとして、一定しないので、夕に近く再び大雨となつた。然し翌日は下山の予定故、日没後、荷下げの準備に取り掛つた。

二十七日午前三時起床。西の強風は雲を飛ばし、霧は淡く、月と星が時々幽に見えた。午前七時出発、小雪溪の側をネプカピラに下り、茲て人夫の造つた縄に乗つて下ることゝなつたが、頗る壮快であつた。途中採集すべき植物が見当れば、縄を止めて之を採り乍ら、白馬尻まで五十分(?)程で下りてしまつた。こゝで十分に休息し、十二時三十分頃白馬尻を出発し、一時四十分猿倉、二時三十五分中分山、三時三十分二股で大雨に襲われ、四時二十分細野の丸山常吉方に着いて休息。五時十分出發して同四十分四ツ屋に立戻つた。

明治三十九年(一九〇六年)七月二十八日、矢沢米三郎、河野齡蔵の両氏登山。
同年八月五日、高頭仁兵衛、大平晟(あきら)、志村寛の三氏蓮華温泉から登山、翌日大雪溪を下りて四ツ屋に下山(「山岳」第二年第一号)。

同年八月九日、小川正直氏再登山。

同月(岡田昇斎氏、越後方面(蓮華温泉?)から登山。
明治四十年(月日不明)八木貞助氏登山。
同年七月十八日、志村 寛氏第五回登山を行なう。

同年八月二十一日、水彩画家丸山晩霞氏登山、絶頂に達して山頂の景とネプカピラの高山植物を描く(「山岳」第二年第三号。明治四十一年十一月一日発行)。

以上を以て、白馬岳の主な登山者の十年間の行動を略記したが、以後は登山者の数も逐年増加する一方、山頂にも小屋の建設も出来、登降も便利となつた。

私達の登山中に起つた上記の騒動の遠因は、登山者の案内者としての労働(日当金四十五錢乃至五十錢)は、平地に働くよりも多し収入があるもので、経験が無いのに山案内に出られぬ多くの村民の羨望嫉妬の的となつてゐた折柄、連日の雨天は山上に人が居るから起つた降雨だといふ迷信で問題となり、案内に立とうという者が躊躇したのを、案内の一行が過大の賃金によつて一部の者を買収し、村民一同の諒解なしに、抜擢的に四名の人夫を山に拉し去つたのが近因だと云ふことであつた。

これでは将来の登山者の迷惑は測り知れない虞れがあるといふので、其の頃山岳会設立の相談が進行中であつたので、これが問題となり、応急の手を打とうといふので、発起人の一人であつた城数馬氏が、長野県内に多数の知人のあるを幸ひ、長野地方裁判所検事鈴木豊次郎氏に計り、同氏を介して北安曇郡役所の横本衛氏を煩はし、一切の事情を具して、調停の勞を執られん事を請うた。氏は村長や警察分署長とも熟議を遂げ、細野区長や区民一同に向つて調停を試みられたところ、

日ならずして円満な解決を得て、細野区民は将来登山者に対し必ず責任を以て熟練の案内者を供給すべきことを定め、又賃金を一定して法外の額を要求せぬことをも約し、更に進んでは登山者の必要に應ずるため、山上に小屋を建設する計画をも定めるに至つた。

「山岳」第一年第一号)。
以上は明治三十八年の秋の事であるが、翌三十九年には、何月頃か知らないが、白馬銅山が試掘(?)を始めることとなり、その主任技師の工学士佐藤通氏から、山岳会事務所(日本橋区室町三丁目十一番地城数馬方)に左の通知が届いた。即ち

一、白馬銅山の出張所は白馬尻よりも下流にあり、探掘も同じく下流に為す筈なれば、為に白馬山の風致も偉觀も更に損する事なし。但し山上植物の濫採甚だしく、今にして何と取締の方法を講ぜざれば、或は珍品の絶滅するものあるべきこと甚だ懸念に堪えず

一、東京よりの登山には、是迄多く、松本、明科又は池田に一泊し、翌日北城に一泊し、第三日に登山すること普通の様なれども、今後は登山の時期次第にては、初日に大町まで歩を進め、第二日に大町より白馬尻まで登り居るを便利とす。

一、白馬銅山では、左記の家を定宿となせり、孰れも白馬登山の為に十分世話を為すべく、自分よりも懇々談じ置きたり。

明科駅前 明科館 安藤 テウ 大町対山館 百瀬 金吾 北城村四屋 木 松沢 貞造

一、明科、大町、北城村四ツ屋間は馬車と人車と共に通すべし、其賃金は左の如し。

馬車 明科大町間 四十八錢
此間約六里、約四時間を要す。

大町四ツ屋間 五十錢
此間約六里半、約五時間を要す。

人車 明科大町間 八十錢、約二時間半。
大町四ツ屋間 約一元、約三時間半。

一、馬車は一頭立六人乗と二頭立十人乗あり、孰れも円太郎式なること勿論なり。

一、山案内は細野の丸山常吉、同広太郎、同嘉吉、同吉重等の内を指定して命ぜり、自分に差支ありて他人を周旋するとも、決して不都合の事を為さず。細野には丸山を名乗る者多きを以て注意を要す。

一、前記の内常吉の外は鉾山の常雇にて人夫頭なり、本年は測量のため皆出役したるにより、單に白馬、鉾ヶ岳のみならず、小蓮華、金山沢、奥乗鞍大池辺に至る迄、從來曾て人足の印せざる所を悉く跋涉せるを以て、案内者として最適当と信す。

一、鉾山には目下白馬尻、乗鞍沢、子平カ平に小屋を建築せり。白馬の頂上には従来のものに修繕を加えて之を使用せり。

本年降雪迄には、沼池、猿倉の両所に小屋を建築する計画なり。

一、各小屋には多少の割烹用具を設備したり。山岳会諸君登山の時は、別に携帯せられずとも、之を使用せられんことを望む。

一、白馬尻迄の道路は本年已に多少の改修を加へたれども、尚本年中には馬道を開く計画を為しつゝあり(「山岳」第一年第三号)。

これで細野区民も、以前よりも収入が増し、登山の専用ともいふ可き人達をうらやむことも無くなったところであるが、この鉾山が何年続いたものかその後の消息を知らない。大雪溪の左岸に、三号の沢などの名の残るのは、この鉾山の試掘の跡を物語るものであらう。(昭和四十一年九月上院)

(追加あり、次号掲載、編者)



◇追貝の銀光◇(Ⅱ)

初見 一雄

伝説もある。後鳥羽院御香鍛冶の一人、豊後行平の流罪の地は追貝であつたそうだ。玉鋼を素材につかうという古来の日本刀作法が何等かのあたで伝わっていたのではあるまいか。砂鉄を原料とする玉鋼は古くは出雲、備前大和、相模、近くは群馬にも伝わっているという。

かといって銀光の山刀の地金にその玉鋼がつかつてあるのではない、いわゆる洋鉄で東郷ハガネの二号を使うという仕込みから初まって、太刀一振り鍛え上げ、それを研師に渡すまでの日数を大凡そ二十日間と計三名がかかりきりだ。その点山刀打ちには「向う鎗」は一人で間に合う、一方が三〇万を越す価格とすれば山刀一挺はたかが知れたものだと思つて、機械打ちならば一日前に八十挺はこしらえられるという、前にふれたように絶対手造りだ。まことに御時勢にそぐわない話だが、コークスで鉄を沸かし、油圧ハンマーで鍛造してゆく機械の作業には形は出来ても魂はいらないという。一寸と大時代な表現だが、銀光はそう信じこんでいる。信じているばかりか、正に彼にとっては信仰個条なのだ。

コークスを絶対に使用せぬと頑張る。あくまで炭だ、それも松、栗に限られる、そしてその樹も枯れたものを焼いて削った炭でなければいけないと云う。生木のものが不可なのは、鋼を沸かし鍛つてゆく途中、炭になった灰が沈んで、粗鋼中の不純分を鍛ちだしてしまえないという。枯木から焼上げた炭の炭はその灰が軽く鍛造の成果に著しい違いが出てくるのだと断ずる。山刀は鞘に収まって初めの一挺前になる。その鞘師も少なくなった相である。只今は沼田の大王が夜なべ仕事に気の向いた時に作る。そして一つあけるのに数日を要する、白木の台に板の樹皮を巻いたもので、之には二種類ある。裾と上部の鯉口の一部分に使った、いふれば普通物「総カンパ巻き」といわれる総くるみ板の皮を巻いた、日本刀でいえば本鞘とも云うべきものの二つだ。

充分にそして完全に乾燥された板の皮には所謂「芽」と称する小さい渦巻状のものが多く出て、之が滑らかな皮膚に紋を作る。こういう樹皮は「総カンパ巻き」には使えない、並品用で落とされる、従つて値段にもひびきがある。その鞘の樹皮の巻き方の詳細は全く知らない、一子相伝とまではよくまいが実際に丁軍で織細な仕事である。その仕事師の名は覚えて貰えなかった。別に隠す訳でもあるまいが、中身の値段よりは高くても一寸言ひ流れていた。

滋賀県の自衛隊に在る次男、嫁いだ娘を除いて長男一家が同居している。弟が一人もいなければ長男は大切な「向う鎗」だ、病氣勝ちで無理な仕事はさせられない相で、この鍛冶仕事は自分一代で終るだろうと撫然とする。今年とて七十六才、前衛が二本抜けている上にほそり／＼との語り口だから聴きにくく、敗戦後の困難もどうやら乗りこえた、若干の田畑で口

を糊してきて平穩無事というところ。隻軀短身乍ら未だ衰えず、一日五合の山羊乳で馬力をつけているとか。「惜しいことをしたもんだ」と次の様な話も出た。

この沼田街道は会津へぬける間道である。「維新戦争」の残党か或は会津と合体して一戦をまじえんとした江戸浪士のいくつかが群れが往來したらしい事と、前述した御香鍛冶の流れをくむものがあったことなどから、近在の旧家には蔵する日本刀が可成りの数に上つていたという。

太平洋戦争後の占領軍の命令が、又はその威をかる小役人の言い出し、日本刀の供出と云う悪令が出た。伝来の、家宝にも比すべきもの。出しさるのが人の情だ。短く裁断してしまえば法令にはひつかからないとの網の目があつて銀光の急がしが始まった。半分に断つて「数百年に仕上げる仕事だ。そのかず、数百年に及んで中には美術工芸品に充分価値する大和時代の古刀も多かったと口おしするという。

銀光作の一振りが最近海を渡つてアメリカへ送られた。ボストンのアブラチア山岳会が新築した山小屋へである。日本山岳会の一の長老の贈送になるもので、恐らくこの長老の名と共にその山小屋の「飾り架」の一隅を占めていることであろう。

将来、彼の往き来の今より衰えることはないといふれば、訪れる日本人登山者の数も或いはふえるかも知れない。問われれば答えられる様にその老婆心から、さしでがましい事を万々承知の上、又その上に、やがては亡き人に数えられる、辺境の地に埋もれた一人の名を伝えておきたい気持ちから、かたはらに秋草なか語るらし……

この一文その一草たるに価するや否や。(完) (一九六六年八月十八日)

＝ 会員の声 ＝

(一)

『山岳』は？

拝啓 爽涼の好季節と相成り、貴下には御健勝の趣よろこび申し上げます。昨秋山岳会六十周年記念の関西集會にて御声咳に接し、種々と御教示賜わり感謝致しております。その節雑誌『山岳』の不着のことを上申致しましたところ、詳細を知らせよとお言葉頂きました。会費が期日までに納入されなかったのが原因かと省みまして、本年は六月中に関西支部へ納入。昨年は本部へ直送、一昨年、一昨々年は同時納入。『山岳』受理は五十七年欠、五十八年欠、五十九年欠、六十年未着でございます。会報は続いて頂いております。

以下六行は都合により削らして頂きました。前記の問題が解決したからです。悪しからず。(編者)

故西岡一雄翁より御紹介賜わり待望の山岳会へ入会「山岳」に、御岳赤川谷の記録を留め、故人に喜んで頂きまして。山岳会は好きで一生在籍をちかっております。黒田先生退会の事は悲しみて余りありと存じます。

会報御編集その他御多忙の処まことに恐縮でございますが、ヘディン先生御存知、またウェストン翁と登山した



(二)

「会報の将来」

(吉沢一郎宛)

大先輩志賀重昂先生の文句をもじれば、会員は会報を読むに当つて「眼光を紙背に徹すべし」会長から巻頭の辞を買って掲げねばならない。「すみませんお願いします」会長もいやとは云えない。「うん書くよ」と引受ける。ところが、ものを書くという事はおっくうなものだ。なか／＼といま／＼して書けない。ましてや会長となれば内容にも文章にも色々な目が光る。夫々考証も要る、うっかりした事は書けない。編集者はあせり催促するが、相手が会長じゃやりにくい。まして無料の原稿でしよう。雑誌記者が食う為の勤めとして、有料の原稿でさえ徹夜で玄関に頑張ることだっている。生活上の商売を別にしたアマチュアがこんな事をやれば、食う食えないは別として、少なくとも日本山岳会誌の編集でもやらされるような人物は社会的にも重要な位置の人で、その努めが果せなくなる道理ではないか。木暮大先輩の頃は時代が三転も四転もしている。

べ切は一カ月も過ぎていく。どうしてこれを切り抜けよう。つとめを放り、好きな山へも行かず、頭はそれで一杯だ。会長が引受けているものをとり下

げもできない。会長をさしおいて下っ端が書いてしまうこともできない。一切を二カ月する。気はあせる。窮余の中の窮余、二番せんじも出来る。会長が悪いんだと言えないそのつらさ。私も昔自分の会社の山岳部で部長の巻頭言を無断代筆したことがあった。以上は私の単なる想像だが、あの誌面の紙背が語るに似た事情を読まねばなるまい。

「乱世の校正は公正を期し難し、あせいこうせいは寛くせいに思ふべし」日本は敗戦によって自信を失った。更に民主主義とやらでどんな不見識な者も一人一票の発言が通るようになった。漢字が多すぎてかんじんの勉強をする為の道具である文字の勉強のため日本人は六年使ってしまったという論が起った。その思想が国語を軽んじ辞書にもない「戦斗」なぞという字が流行した。その流れは漢字制限となって表われ、漢字は廃されてが用語だけ残り、輿論が世論、聯盟が連盟、編輯が編集となりまかり通った。それはそれなりに固りかかっていると言語審議会なるものが制限漢字にこの字は加える。この字はこう書かざるべし。かなづかい、こう改めるとい、文部省が発表する。この審議会が各人好きなことを言つては朝令暮改をやる。文部省発表はするが徹底力はない。交通違反のように警察が郵便物を検閲し取締つたり看板の誤字を摘発しない。最も強制力を及ぼす入学試験でさえ、自分が学んだ時の文法で書いてよいように指導している。人々は文部省があまり変えるので現在時点の正しい文字や文法を覚えようとする意欲は全くない。文字文法が正しいに越したことはない。だがその文書を発行する時点における無欠の文も翌月どうなるかわからないこの国語の乱世にとにかく言うのは、晩餐会に英国のテーブルマナーの

人が米国のそれを笑うに等しい。

「会報は官報になすべからず」私はあの叱正文によって最も恐れる影響は今後の原稿のことである。「オレの原稿は吉川英治級だ」と常々うぬぼれている奴はいない。現に私も赤面するような原稿を掲載していたことがあつただけに、叱正文は「私のことか」とギョリとした。もう出す気はない。でなくてさえ原稿がなくて本文第一項の有様なのに今後どうなる。有名校は大勢が受験するからその中から優秀生が見つかるのである。来ない原稿から何を選ぼうとするのか。過ぐる東京オリビックの時、日本人は国の名誉をかけてと意気ばるが、タカが国際運動会ではないかと言われた。オリビックがアマを標榜している所我が日本山岳会と同じ、偉そうなことを言つたタカがアマチュアの寄合ではないか。会報も力むことはないと思う。

あの叱正文によって担当者も会員も萎縮し、採用される原稿は職業的とも思われるような「岳人」等に執筆する人の高度の論説と新会員住所と横文字の図書目録だけとなり、甘くもすっぱくもない、しかし、文法も文字も端正なうすっぱな官報のようになり、郵便物が届いたら目も通さずボイとフアイルされる、いやフアイルされればい方、どこかの会社の貸借対照表のように肩かごに封のたま投げられればよいが、低調を叱って更に低調の度をつよめそうな気がする。会報はピラミッドの頂点の人のものばかりではなく、底辺にある人のためにも、一人々々のものでなければならぬ。(完)

会員 五九五一
清水 周一

× × × × ×

(三)

「会費の払込み」

残暑御見舞申し上げます。会報二五二号を読みまして、いささか感ずることがありましたので、筆をとりました。

その前に、会報は特に地方会員の唯一の会とのつながりであるため、少なくとも月一回の発行にして欲しいと提案したことがあります。このことは私のみでなく多くの人がそのように希望していたと思います。それが曲りなりにも毎月の発行になったことは、実にうれしいことです。編集の御努力には感謝しております。

以下二十四行は入会金のことが書いてありました。これも都合により削らせて頂きました。悪しからず。

次に会務報告の中に、四十年度会費未納者は会報の送付を停止していることです。これも理事会の決定です。で、とやかく云えませんが、会費の滞納者は何と云っても良くありません。滞納者の恐らく大部分は、納入の意志は十分ある人だと思ひます。面倒くさいのが、ついのびのびになつていゝるのではないかと思います。たほめこてではないでしょうが、山好きの人は概して、個性的、悪く云えば変り者が多いでしょう。そのような人に対して、年一二度の会費督促をお願いとは完納しないだらうと思ひます。何年も滞納している人はともかくとして、昨年度の未納者にも会報を中止するのは少し酷な気がいたします。会報が唯一の会とのつながりとなつていゝるものにとつては、会報の停止は事実上の除名と等しいのではないかと思います。年度始めには会報の中へ振替用紙を同封するなどして、出来るだけ納入しやすい方

法をもう少し講じていただきたいと思ひます。私も今年分は未納ですが、振替用紙が会報にでも同封されておればもっと前に納入できていると思ひます。我々のような支部組織をもたない孤立した地方会員は全国でかなりの数に上ると思ひます。このような会の底辺をささえる我々地方会員を結果的に離脱させるような方向だけはとつていただきたくないと痛切に感じます。このことは私が申し上げるまでもなく十分お考えになつていゝると思ひます。が、実情はなかなか理解し把握できないのではないかと思います。あるいは私の一方的なことを申し上げたかも知れません。がこのような意見を、我々のような会員にとっては、一体誰にどのようにして伝えたらよいのか、その場をもたないわけですから、それが最も身近に感ずる会報の編集代表者にとぶつたようなことになりましたこと、御了解いただきたく思ひます。

私、長野の山奥に生れ育ちましたが山には不便な茨城県に住むようになってから、山にめぐまれた会員がうらやましく思ひます。

暑さの折御健闘をお祈りいたします
八月一九日
会員 五〇九〇
笠井 篤

「Die Alpen」の三ツ バーン (Bhutan)

が来たので目次に眼をやる。最初のこと、Rudolf Häny, Bhutan-unbekannter Himalaya というのが出ていた。

中は六項目に分れていて、一番興味のあるのは二番目の Hochhimalaya 略図上の山名や高度も大部増えてきた。これに関連した参考書は、秘境ブータン、(中尾佐助)、Mountain

World(1964-65)中のB.C. OlshakとA. Gunserの書いたもの、その他。

Tayapampa (c. 5800 m)

有名な Alpanayo の北に続く首記の処女峰が Richard Goody と Don Morton の二名によって初登頂された。

尚、同隊に参加した David Atherton は、現在まで貧弱な地図しかなかったこの地域の地図を作成中であるという。早く見たものである。

未踏の最高峰陥落 II ヘル

Manfred Sturm, Reinhold Obster, Peter Scholz の三人が、この六月二十一日 Siula Grande(6356 m) 経由でその南にある Siula Chico (6265 m) の初登頂に成功した。(ドイツ隊)この山は今年まで、ペルーの未登の最高峰として、毎年各国の登山隊に狙われてきたものである。

G.N. Humphreys の計報

Hugh Rutledge が二度目の隊長で行った一九三六年のエベレスト遠征に、医療係として参加した Gordon Noel Hanfords がこの三月十一日に他界したとある。生れは一八八三年。随分変わった経歴の持ち主で、劍橋の卒業だが、一九一〇年にメキシコへ探検に行き戻ると飛行機が好きになり航空隊に入隊、第一次大戦に参加、フランスで捕虜になり、その間、植物学の研究、戦後ルウェンゾーリに何回も登山、一九三一年には Ellesmere Landへ遠征、三五年の秋に戻る。そしてエベレストも可なりこの人の直接の影響をうけているらしい。ロングスタッフの娘さん達にもいいおじさんであつた。(G.J. Sept. 1966) (吉沢)

アルゼンチンの二つの山岳団体

在フエノス・アイレス
北大O・B 増山直義

(1) Federacion Argentina de Montanismo y Afines

この団体の主な目的は山の教育面を
広めようとしていることで、大きな登
攀はしていない。主な仕事としては、

- ① 山岳団体間の連絡をはかる。
- ② 遠征隊（外国からの遠征隊、国内の遠征隊）の世話をする。例えば外国からの遠征隊が必要とする税関の問題、アルゼンチン国内の物資の輸送の問題などをうけおう。この団体の会長は軍人であり、今の政府の大統領の親友でもあり、ダウラギリ遠征隊の隊員でもあった。
- ③ 青少年への山の教育。
- ④ 山岳学校（スキー、岩登り、氷登りの技術を教える）をバリロッチェ、コルドバにもっている。
- ⑤ 山の科学。
- ⑥ 小屋。アコンカグア、コルドバ等の山に必要に応じて増設したりしている。
- ⑦ 山の図書館。
- ⑧ 季刊紙“La Montaña”の刊行。
- ⑨ 山の案内。
- ⑩ レクリエーションとしての登山の啓蒙。
- ⑪ 遭難対策。
- ⑫ 山の写真展、映画会等の開催。

等のセクションがあり、アルゼンチン全体に支部をもっている。会員総数は三、四五〇名。過去における登攀で記すべきものはない。
またこの団体は U.I.A.A. (国際アルピニズム連合) にも加盟し、外国の

山岳団体と常に連絡をとっている。住所は

José Pedro Varela 3948, Buenos Aires

(2) Federacion Argentina de Ski y Andinismo

この団体は殆んど登攀者の団体で、前記の団体のような仕事はせず、遠征隊を組織し、すぐれた登攀を行なっている。この団体に属しているクラブは

- CABA—Centro Andino Buenos Aires 500名
 - CAB—Club Andino Bariloche 1,500名
 - CAM—Club Andino Mendoza 400名
 - CAC—Club Andino Cordoba 200名
 - CAS—Club Argentino de Ski 1,500名
 - CAT—Club Andes Talleres 200名
 - CAP—Club Andes Revelche 50名
 - CASJ—Club Andino San Juan 200名
 - その他 6 clubs 400名
- 以上の通りで全会員数は四九五〇名です。今迄に行なった主な登攀は、
- (A) CABA によるもの
 - 1947 Patagonia San Valentine 山の初登
 - 1947 バイネ山のファルソンの初登
 - 1947 Patagonia の Balmaceda 山 (3,100 m) の初登
 - (B) CABA によるもの
 - 1954 Nepal の Dauragiri 遠征
 - 1955 Patagonia 大陸水河の中に Don Bosco (2,900) 山の初登
 - 1956 Patagonia 南端の最高峰サン・ロレンソ (3,700 m) の第2登
 - 1959 Patagonia バイネ山北峰の第2登
 - 1963 Mendoza 地区のクロデル・プラタ山 (6,400 m) 南壁初登

1964 同上冬期南壁初登攀
1964 アコンカグア、ボラツコ水河の第3登

1964 Patagonia 大陸水河にある Inianitas (3,000 m) の初登

1965 FitzRoy の上部ルンゼからの初登

1965 バタゴニア大陸水河の奥にある Mellisoz 山 (3,400 m) の初登
1965 Peru Jorupaia 東壁の初登
1966 アコンカグア南端の新ルート
1966 Patagonia Marconi (2,700) 山の初登

といったところです。住所は
Viamonte 1560, Buenos Aires (以上)

☆パール・ワイワシユ☆

☆山群での荷物運搬料☆

☆こいつて☆

左記のものはパール・リマ滞在の宮下昭氏から過日送って来たものの訳文であるが、今後の参考までに、ここに掲載しておく。少し遅れたことはお許し願いたい。(編者)

契約書 (Contrato)

コルディエラ・ワイワシユのチキアン (Chiquian) 地方、ボクバ (Pocpa) に住む、ナティビダ・ベドン・バネラ (Natividad Bedon Barrera) は、

本年度登山隊の荷物運搬の便宜をはかるため、文部省アンデス局長の許で本契約書に署名する。

ドイツ、メキシコ、オーストリア、日本、英国その他の登山隊が受諾し得る契約の条件は次の通りである。

一、本契約 署名者は、登山隊

に対して、荷物運搬用の動物 (burros y caballos de cargo) の賃賃をする。これらの運搬動物は、アンデスを旅

行する場合の荷物運搬に利用するものであり、その契約の最大期間は次の通りである。

Jahuacocha ペースまで三日間
Charhuacocha までは三日半

その他の地点については別に考慮する。

二、荷物運搬用の動物は、登山隊の指示する期日に、チキアンに集められる。登山隊の到着の遅れた場合には、それらの動物の飼料として、一頭当り \$8.00 (ハソーレス、一ソールは一三円位) と、荷役動物の通常賃賃料の半額の支払いを受ける。

荷役係ベドラーが遅れ、期日に到着しなかった場合には、一日当りの賃賃料の半額を失うことになる。

三、尚、賃賃料は次の通りである。
馬 一日 六〇S
ろ馬 一日 五〇S

馬方 (動物五頭に付き一人)
一日 六〇S + 食費

以上の他に飼料として、チキアンでは、一日動物一頭につき、八S、同じく宿泊地ボクバでは、四Sを支払わねばならない。その他の宿泊地での飼料は無料である。

帰途には、動物一頭、馬方一人に対して、それぞれ前述の日当の半額を支払うこと。

四、契約者ベドンは、日当として、八〇Sの支払いを受ける (馬方たちの監督者として)。尚、帰途も同額の日当の支払いを受ける。これは常に監督、監視を続ける必要と責任があるからである。

五、運搬を引受けた資材について、紛失、損傷があった場合には、契約者は、警察署長立合いの下で、その返還弁償の責任をとる。

六、登山の帰還に当たっては、契約者は、各指揮者の指令に基づき、契約書の条件の規定により、運搬、移動を行なう。

七、馬方 (ariero) の責任者は次の通りである。
Erasmio Bedon, Gil Bedon, Vidal Flores

彼らは、ボクバとその近辺に住んでいる者である。

八、登山隊員は、チキアン到着の期日を、出来れば八日前に、チキアンの Novo 夫人を通じて、契約者に連絡しなければならない。
以上の条件を遂行するに当り、本契約者は、文部省アンデス局長の下に、署名するものである。
リマ市、一九六六年三月一日
Natividad Bedon Barrera



ウスアイヤの町とオリビア山 (4700m) 石原国利氏写 (会報二五六号参照)



いって住んでいるような印象をうけました。Sporeは近く、数年の内に自由港を解消すると思われています。そうした影響のせい……という訳ではないのですが、ペナンの方が更に安い物が手に入ります。

わろんこではPenang Hill (855 m)まで足をのびして、涼気を充分吸い込んで参りました。

会員岳友通信 Penang より

拝啓、今年の夏はさぞお忙しく過ぎたことと存じ上げます。当方、P・IのBisleyで一日間をヤシノ実林で現地人と大いにenjoyし、ザックがどんなものに使ったかなどという英語で説明したことは、思い出になりました。山靴が役に立ったのはこのだけで、Hong Kongは買物と諸々の古物漁りに終始し、Victoria Peakで一時間程過ぎたのがせいぜいでした。

Sporeは専ら食道楽に終り、一つだけ、ジョホール地区で、現地のジャングルというのを見て頂き、相ついで建設されているアパートの群を唯ぼろ然と見やるのみでありました。将来、日本人の観光進出を予期していることも、チラリと耳にしました。

モンスーンのしりを僅かに味わって、巨大なスコール群に囲まれての航海の旅は、正にロマンチックそのものでありましたが、マラッカ海峡に入るや、全くの静寂と化し、Penang島に寄港した八月二四日の早朝は、肌寒い位でした。雨季とはいえず、澄明なペナンの島巡りは、楽しさこの上なく、たむろするマレー人、インド人、中国人に交って、英国人が僅かにしがみつ

です。
四一・八・二五 坂下心一
(編者宛)

N・B・クリンチに会う

大阪山の会

暑さ酷しき折柄如何お過ごしでしょうか。御見舞申し上げます。今年はまだ登山ブームが、もろかえしたような盛況の夏山だということですが、私たちは、お陰でこちらの静かな山々を登り、快適な旅を続けています。現在、カナダから南下してUtah州のSalt Lakeの南まで来ています。日本を出る前には是非御挨拶にお伺いするつもりでおりましたのに、準備やら雑用に追われ、昨秋、小伝馬町の会社の方へ上って、お会いしただけで終わりました。申し訳なく思っております。

私たちの会の方から連絡が行っているかも知れませんが、現在までの登山の報告をさせていただきますと、六月十二日 Vancouver B.C. を出て、Selkirk 周辺で、二つの peaks Assiniboine 他一つの山には六月二十五日に登頂(まだ随分雪が多く、地元の見解では、まだ Winter Condition だといわれています)。それから Bugaboo という山塊に入ってカナダでは少ない granite の peak を八つばかり、Snowpatch や Houser Spire などは非常に難かしい登攀でした。七月中旬から北上して、Rockies の Mt. Robson には七月十八日に南面から頂上に立ち、この日、半日の晴天があっただけで、殆んど頂上をみせない天気の良い山でした。帰途 Columbia Icefield の Mt. Athabasca という美しい雪の山に登り、往路試みた Mt. Sir Donald (六月中旬、雪のコンディション悪く敗退) をもう一度狙ったのですが、雨と雪にたたら

れて駄目でした。今年は、Selkirk、

Rockies 共、幾らか wet な気候らしく、二ヶ月ばかりの間に、かなりの peaks に登れたのは幸運だったと思っ

ています。七月末に Vancouver B.C. に帰ってきて、五人のうち二人が帰国し、残った三名で、いま本土の山旅を続けているところです。カナダでは Rockies の Mt. Robson と Assiniboine など五つ、Selkirk では Glacier 周辺で二つ、Bugaboo で八つというのが総決算です。

こちらの登山家たちと随分会い、話をしましたが、Canada には Coast Range や Yukon の方に、まだまだ新しい山域があり、全くうらやましい限りです。A.C.C. の President の R. Hind 氏や Varmer の Paddy Sherman, R. Broda 氏などもあいました。もう、お手許に届いているだろうと思いますが、C.A.J. 66 に Canada の 1964 Batura Exp. の報告が出ています。

アメリカに入って Washington 州の Mt. Rainier には、八月十一日に登頂。四方に氷河をはり出した図体の大きい良い山だと思いました。頂上から Adams や Hood など、天気が良かったので、よい眺めでした。Oregon の美しい National Forest の中を東に突走って Yellowstone に入り、南下して先日、八月二十二日 Wyoming の Grand Teton では頂上に立つことが出来ました。もう新しいルートのと

りようがない程、各サイドから登られています。中位のグレードのルートに登りました。これから Utah, Nevada を経て Calif. に入り Whitney の東面と Yosemite の岩壁をのぞいてから Mexico の三つの Volcanos に行く予定で、十月末か、十一月初旬に帰るつもりにしています。

昨秋お伺いした折に Nick Clinch へ

の紹介状をお願いしておきながら、頂戴する機会がなく、こちらに来てしまったのですが幸運にも Grand Teton に家族連れで遊びに来ておられた同氏に偶然に会うことが出来ました。最初 Clinch だとは知らずに山の話などしていたのですが、東京に Mr. I. Yoshizawa なる友達がいて知っていたのかと問われ、名前を伺って初めて Clinch だとわかり恐縮しました。今月末か、九月初に Calif. のお宅の方へ寄らせていただくことになっており

Karakorum の話や、Whitney 東面、Yosemite の Climb についての良き Advice をしてもらつてもいいと思います。全くラッキーでした。とにかく Expedition とちがって、気ままな山旅ですので、登山も楽しいですが、アメリカの自動車旅行も捨てがたいおもしろさがあり、道中の山では、またこちらの登山家たちと会って話すことが出来るのも、全く楽しいことです。

旅程の関係で New York の A.A.C. には行けませんが、San Francisco の Sierra Club を訪ねたい。出来れば、アメリカの Everest たちにも会いたいと思っています。Everest とえば、今、この新刊の Everest Diary という本が出ています。Lute Jerstad の Diary をもとに書かれたものらしいです。

また新しいニュースでもあれば、お便りさせていただきますが、先ずは御報告と暑中お見舞です。お休目愛の程、お祈り申し上げます。

八月二十五日
(吉沢一郎宛) 吉永定雄

◇ (編者注) 九月四日付で来たクリンチからの手紙の抜粋を御紹介しておく。
Dear Mr. Yoshizawa
Thank you for kind letter of July 23rd and for your beautiful flowers

book (注・山溪の『山の花?』) which arrived in excellent condition. It is a very beautiful book and I am delighted to have it.

We have been having a very busy time. I went to the Tetons for two weeks with Betsy (his wife). While I was in the Tetons talking with some friends at the climbing rangers shack, I met 3 Japanese climbers. I asked if they knew you and they said yes, they did. Then they asked me who I was and were surprised to meet me.I was unable to see more of them in the Tetons, but they passed through Pasadena a few days ago and spent an evening here which I enjoyed very much...

Very busy with work and also with other projects. I was offered the leadership of an expedition, but it will be at least ten days before I can find out whether the expedition will, in fact, take place and whether I can participate. If so, I will leave work here to organize the trip which will take about 3 months.

Again, many thanks for the fine books. I was delighted to meet Mr. Yoshinaga and I regret that you could not see their surprised faces when I asked them if they knew my friend Mr. Yoshizawa.

With best wishes,

Nick Clinch.

尚、十一月十七日付の手紙による、いよいよ三カ月の遠征行が決って目下眼の廻る忙しさであるという。行先は南極大陸、多分例のビンソンであろう。いずれそこから手紙をくれるという。(I・Y)

◆ツェルマット便り◆

——マッターホルン—— 第三回目の登攀——

北欧では、あまりよい天気には恵まれませんが、スイスに入ったとたん雲一つない天気が多く、心まで晴々とした気持ちになりました。

八月十二日午後一時、ツェルマットを発ち、翌十三日午前十三時四十五分まで行き、マッターホルン・ヒュッテにヒュッテを出発しました。

ガイドは、老練のハインリッヒ・タウグワルダー。一〇年前、かのウイバーが、このマッターホルンを初登攀した時に、ガイドを勤めたピーター・タウグワルダー親子の子供の方の孫に当る人です。それに福岡大学山岳部OBの植松満男も同行しました。

今年は北壁の氷雪が例年に比べて著しく少なく、ルートとしては頂上から約三五〇米下から北壁に移るのですが、アイゼン無しで登れる位でした。しかし、下りがけには、勿論アイゼンを着けました。なお、東壁は例年より稍々氷雪が多いように感じました。

風も穏かで、絶好の天候に恵まれ、八時半過ぎに無事頂上を極め、細い尾根を通して鉄の十字架のあるイタリ側の頂上まで行って、写真を撮ったり食事をしたり、すばらしい眺めをほしいますに、一時間ほど過し下山しました。

この山は何度登っても、すばらしい山ですが、決して生易しい山ではないことを改めて痛感しました。前日(十二日)には、二人の登山者が墜落死亡しましたが、今年の夏で五人目だそうです。何れも、ガイドなしの、いわゆる雷登山者らしく、タウグワルダーもその無謀さを嘆いていました。

私も、もう初老の年令に達したことで、マッターホルンの登攀は、こ

の辺で最後にしようと思いますが、この山の魅力は、いつまでも私を惹きつけることでしょう。ガイドのタウグワルダーは、日本人でこの山に三回も登ったのは貴方だけだといっていました。が、たとえ、それが事実であっても、大したことはないと思います。この山に三回以上登攀する人は、そのうち、きつと出てくることと思います。ただ私にとって、あとの二回の登攀は、五十才を過ぎてからであり、五十を過ぎて、二回登ったことに多少の意義があると思うのです。要するに、日頃の心がけ次第では、五十過ぎて、この程度の山に登れるということを実証したわけであり、出来るだけ長く山を楽しむように、登山寿命の延長をはかるために、何らかの刺激ともなれば幸せと存じます。

◆

昨年、アイガーの北壁を登攀した高田光政さんが、八月十一・十二日に互って、マッターホルンの北壁の登攀に成功しました。パーティは、シルバ・キルシコヴァという、チェコスロバキヤの一流登山家と、ゲルハルト・パウというドイツ人(十九才)と高田さんの三人です。高田さんとは、図らずも、ツェルマットで同じホテルで、私が山を下りてツェルマットに戻った夕べ、同氏の北壁登攀成功と、私の三回目の登頂を祝うため、近くのレストランで、お互いに祝杯を挙げたことでした。彼は、明日(十五日)、ここを発ち、グリーンデルワルトに向います。丁度、明日が昨年彼と一諸にアイガー北壁登攀中、遭難した渡部さんの一周忌になりますので、墓参に行くわけです。彼は、そのうち、ヨーロッパの三大北壁の残る一つ、グランドジョラス(モンブラン山塊)に出かける様子でした。では又。

脇坂順一

◆日・ケ友好隊便り◆

編者からの依頼に対し、早速記録と写真を送って頂いた。多謝。

前略、現在遠征中の記録を整理しているところで、詳細に亘ることは出来ませんが、左に簡単にお知らせいたします。

七月二十九日 Tbilisi を出発、 Georgian Military Road を北上して Kazbegi Hotel に入り、翌三十日、カズベクの基部にある Mero Stany (メテオ測候所 3600 m) に登り、八月一日に日・グー一五人でカズベク (5047 m) に登頂致しました。この山は丁度富士山と同じで、終始雪の斜面を登り、上部が可なり急な傾斜をもっていました。カズベク登頂後、トビリシに戻り、八月四日、空路 Kutaisi に到り、それから車で Rioni 河を北上、Sairme より Arbeli 峠を越えて Tskhenis Tskali 河を北上、Lentchi にてジープに中継されながら、ツェニス・ツカリの源流にある Koredashi 部落の Alama 登山基地に入ることが出来ました。この間、クタイセから約 140 km の間は日



Kazbek (5047 m)

翌日、メステアを経由して Ushba の山麓 Ushkanli 部落のジャバリ記念館に泊りました。そしてウシバ (4780 m) を目標に準備をし

本の風景と全くよく似ておりました。この登山基地にはグルジアの登山学校があり、多くのアルピニストが講習を受けています。そしてこの基地から眺められるアイラマ (Altamash 4514 m) は非常に急峻で、屏風を立てかけたような山です。その登攀には最低四、五日は必要とのこと。当初の目標と日程を考慮してこの山はあきらめました。このアイラマ山塊は Shikara (5201 m) より南東に Ushguli, Sapobner, Nankhama, Unanuso, Alama 等が続いている大ノールカサス山脈の一部になっています。

八月八日、ウナムン (4000 m) とナムクバメ (4278 m) を登るため基地を出発、Unanuso Plat に日・グー一八名がキャンプをした。ナムクバメとウナムンのコルから懸垂氷河となって落ちているその右岸の側壁がルートでした。

翌九日、ブラットから前記ウナムン・コルに登り、二パーティに分れてウナムンとナムクバメに登頂することが出来ました。

いずれも岩稜と雪後の登攀で、約一〇一二時間の行動です。

八月一二日、アイラマ登山基地から Mestia に向うため、トラックで Zugdidi 峠を越えて Ushguli に入り、それから Inguri 河を下ると、道路の崩壊などで予定のメステアまでいかれず、Kala という部落に泊りました。

翌日、メステアを経由して Ushba の山麓 Ushkanli 部落のジャバリ記念館に泊りました。そしてウシバ (4780 m) を目標に準備をし



Ailama (4544 m)

た訳ですが、日程その他グルジア側の都合で計画変更の余儀なきに到りました。その結果は、Charine Tau (4380 m) と Shixelida (4000 m)、Shoroxusky (3300 m) に決定、ウシニバ谷に入り、シヘリダ、プラットにキャンプ。八月一六日にシヘリダの二つの峰に全員登頂。

翌一七日、日本隊四名、グ隊二名によって、ウシニバ水河からウシニバ峠を越えてウシニバ・プラット。チャツイン・タウの登頂に成功した訳です。

そして今日中に Ushkanali まで下山するという、かなりしんどい行動でした。

以上登頂したビークは六峰を数えますが、当初の目標に総力を結集することなく、計画を変更した無念な気持ちはいまでもありません。

しかしグルジア側の山岳地域を可成り広く歩くことが出来たことは、今後



Ushba の双峰

の参考になると思います。その他、計画変更の理由を私から今、吉沢様にお伝えすることはさし控えたいと思います。後刻記録が整理された折にでも、正確な記述をもって明らかにすべきかと考えますので、御諒承願いたく存じます。

尚、訪ソ滞在中の山岳地における活動をいつまで記述したことも御諒承下さい。

この度の遠征計画には多大の御指導御支援を賜わり厚く御礼申し上げます。乱筆、乱文にて失礼いたします。

四一・九・一八

Y・A・C 杉山敏弘

(追伸) 九月一七日、袋一平様は、グルジア共和国より Shota Rustaveli 八〇〇年祭に招かれ、再びトビリシに出発いたしました。

Huascarán 北峰の新登頂

Robert Paragot を隊長とする仏の七人隊が、北峰の北壁(北東稜ともいう)を完登した。だが残念なことに下降中 Lepince Ringnet が落石にあつて死んでしまった。あの下は私も通ったが、相当な岩壁である。(I・Y)

Ⅱ 図書紹介 Ⅱ

ウインバー伝

— 栄光と悲劇の人 —

F・S スミス著

吉沢 一郎訳

ウインバーのアルプス登攀記の邦訳は遥か以前に出版されていることだから今更茲にその内容についての紹介等する必要もないが、ウインバー自身の登山家としての以外の、云わば一代記というものが、このスミスのもの位詳しく書かれている書物は先ず他にないのではないか……。

それもスミスのような自らも豊富な登山歴を有する者によって、斯くも詳細な一巻が著わされたことは、極めて意義のあることであり、それにまた吉沢君のような登山の総てを知り尽くした上に、語学に堪能な士によって邦訳のバトン・タッチが受け継がれたということは、誠に適切な処置である。

ウインバーの「アルプス登攀記」を読んで山のトリコになったという登山家は、僕の貧弱な知識を思い起して見ても、スミスの勿論のことフィンチにしても、ヤングにしても、シフトンにしても、判然とその著書に述べていることでもあり、吉沢君にしてもこの例には洩れまい。既に若いOB時代、昭和七年に、マッターホルンの「ツムット・グラート断片」その他を発表しており、このトリコになっていたのであるから、今度のこの邦訳も同様に課せられた当然の使命でもあるわけだ。

全員、二段組の三百員以上に渉るもので、如何に山の本の蟲の吉沢君だといつても、大変な御苦労だったろうと感服する次第である。

第一章では、ウインバーの少年時代から、二十才にして初めてアルプスを見る迄のことが、日記になって表わされている。初期のイギリスの登山家の

多くが、経済的に裕福な家庭の人達が多かったのに比べて、ウインバーはその点ではむしろ反対で、それだけに家庭的の苦勞も多く、従って、決して社会的なタイプではなかったと云うことは、予てから聞いてはいたもののこの克明な日記を見て初めて、成程とうなづけるような気がする。また、一面、それだけに、あのよう不屈不撓の精神が、マッターホルンと取組まずようなことになったのであると、想像するに難くないのである。

一八六〇年以後のアルプスにおける活動、殊にマッターホルン登頂については勿論、この本のヤマではあるが、晩年のウインバーについては、今まで我々の知らなかったようなことも、この書には詳しく書かれてある。

何れにしても、アルプス初期の登山者の名著が「世界山岳名著全集」によって順次邦訳されて行くことは、我々のような語学に疎い者にとっては、誠に有難いことである。この辺で、もう一度、イギリス初期の登山家から始まって、A・Cの伝統を克く今日まで守り継いで来た、数々の登山家の著書を漁るのも、決して無駄なことではない。

例えばヤング・Mountain with a Difference、とか、かつてはフアラをしてウインバーの「アルプス登攀記」と共に後世の登山史上に残る名著としては是非英訳するべき著書だと叫ばしめた Julius Kugler の名著「Aus dem Leben eines Bergsteiger」等は是非吉沢君のような篤学の士によって順次邦訳されて行くことを切に望むものである。(四一・九・一一)

会員番号 八六五号

成瀬 岩雄

あかね書房刊行、昭和41・8・25

三七七頁、定価七八〇円

写真および地図挿入。

× × ×

ANDES, '65

浅野ア・テス探査隊
中間報告書

昨年、アボロパンバ中南部のブバヤ山群(一九六一年一橋隊が活動した地域)に行った浅野探査隊が中間報告書を出した。騰写版刷りで中味一〇頁の簡単なものだが、隊員、行動、登った山など一応必要なものは全部記載されている。いわゆるアペンディックス的なものはないが(これは正式報告書に載ろう)われわれにはこれで充分である。(但し横文字のないのは困る)

ブバヤ山群東面(初探査)で初登頂峰は、コルキニ(5810m)、クチヨI(5655m)、同II峰(5530m)、ワリーニ(5668m)、コロワリ(5666m)。アカマニ(5836m)から北へウランカヨック(586m)、吉沢、丸山が第二登を上げたもの)への縦走は立派な記録。尚イリマニ北峰(5640m)へ西稜から登ったのは彼らが初めてだという。イリマニの中央峰が610mと明示されているがこれの出所を明らかにして欲しい。この峰の高度は今まで(私の関する限り)わからなかったものである。(吉沢)

◆千葉大帰国◆

千葉大学アフリカニスタン調査隊の出発につきましては格別の御援助を賜わり深く感謝しております。

お蔭様にて7月20日ミル・サミール(6060m)の登頂に成功し、その後調査の目的も果し、去る九月一三日隊員一同無事帰国いたしました。諸資料を整理し、あらためて詳細な御報告を申し上げますが、とりあえず御礼を御挨拶です。

昭和四一年九月

千葉大学アフリカニスタン調査隊

千葉大学アフリカニスタン調査隊



十月理事・評議員会

(六日・ルーム)

出席者 松方会長、理事—辰沼、村木、松田、山崎、宮下、竹田、住吉、山口、小方、広谷、長尾、竹内、評議員—島田、堀田、中屋、佐藤、石原、村井、以下委任—三田副会長、渡辺副会長、加藤、大塚、平山、倉知各理事、吉沢、折井、望月、津田各評議員
△議事

三種郵便認可申請の件

諸般の情勢により認可申請を行なうことにし常務理事会に手続事務を一任することを決める。

(2) 遭難対策シンポジウムの件—辰沼会場三越、日時十一月末ということ目下折衝中である。本シンポジウム

Yerupaja (6634m) の疑問

Carter からの通信によると、今年七月 Lell Norman Patterson と Jorge Petersek の二名が21日かかって西壁から、その後 David Jales と John Crowley が南側から登頂したということである。この山は一九五〇年に Dave Harrah と Jim Maxwell によって初登頂されたことになっているが、これは眉唾ものではないか、という話が大部出て来ているという(宮下昭君の手紙)。昨年のスイス隊もこれを疑問視しているし、カーターもその組で、来年のAAJにはこれについての記述が出るらしい。ハラーがカーターとピーターソンに宛てた手紙をいざ紹介しよう。(I・Y)

は本会の遭難対策委員会が企画するが運営面では東京支部が協力し、東京支部二十周年記念行事の一環として開催することを決める。

内容については、本会の特徴を生かし、従来のものとは違ったユニークなものとし、教育面(教育大Ⅱ河村、前川)、行政面(文部省スポーツ課Ⅱ松島課長)、心理学の面(小林、秋山)、

発育・発達(京大Ⅱ講師未定)の各部門よりエクスパートに出席して貰った遭難事故に対する問題点について各面より討議することを考えている。(司会Ⅱ本会辰沼理事)

尚本件に対する予算の臨時支出を承認可決する。新聞社に対する交渉も、辰沼理事一任とする。

(3) 「山岳」山日記 編集状況報告の件 — 松田・村木・竹田・竹内

(4) 各担当理事業務報告

① 庶務 — 松田

・会員移動—物故会員、退会者、名義変更等につき説明(一〇頁参照) 尚今年の年次晩餐会で永年会員として表彰される会員は次の八氏である。(カッコ内は会員番号)

田中薫(四四四)、小島栄(四五〇)塚本純(四五六)松本善(四四九)辻 莊一(四八七)目黒四郎(四五九)大島永明(五一一)佐々木健太郎(五二一)

② 海外連絡

海外連絡委員会報告(会報二五〇号参照)

その他、ベルギー山岳会より Eli Tins 嬢来日、インド、エベレスト登山隊長クマール氏より訪日希望の書信が届いたこと。九月十九日、松方三田、日高、加藤、大塚、松田の六名で、エベレスト登山の件で外務省に伊関大使を訪問せる旨報告あり。

尚、海外連絡委員会では目下関口委員が中心となって定款を抄録したものの英訳を行なっているが、これに関連し、外国在住の会員の会費送金の便宜を計るために東京銀行本店に The Japanese Alpine Club の口座を開設したい旨要望あり、本件承認す。

③ 自然保護

本会自然保護委員会では自然保護に関する基本原則について検討し人間生存のためのよりよき条件、動植物生存のためのよりよき条件、国民福祉、原始地城法等の観点になって自然保護基本原則を文章化することにした。

④ 婦人 — 山口

山口理事ニュージランド登山の留守中の業務は理事代行として三枝礼子嬢にお願いすることを決める。

(5) 支部行事について

① 東京支部二十周年記念行事

十月十九日記念パーティー、十一月三日記念登山、十一月末遭難対策シンポジウムを開催の予定 尚記念品として、文鎮兼ペーパーナイフ(頒価一、〇〇〇円)を三〇〇個製作した。

② 山梨支部

小集会を十一月一日府で開催、支部の要請により本部より吉沢評議員が出席した。

③ 石川支部二十周年記念式典

十一月六日金沢にて開催の予定。深田評議員に依頼することにする。

④ 宮城岳連岩登り講習会に講師派遣の件(十月二十二日・二十三日)

本会より倉知理事を講師として派遣することを決める。

⑥ その他報告事項

① 学生部アラスカ・カナダ登山隊帰国報告 — 錦織隊長 (以上)

東京支部会務報告

支部創立二十周年記念パーティー

十月十九日、於マツヤサロンの

定刻より少々遅れて沼倉委員長の開会の辞が行なわれ、続いて石原支部長による創立以来二十年に亘るわが東京支部の歴史の沿革が語られた後、三田幸夫氏により、日本山岳会の会員相互がますますその親睦を深め、女子会相互を含めて今後の立派な登山活動に期待したいとの御挨拶をいただいた。全員そろって乾杯。賑やかな談笑のうちに広瀬・神谷・村井・坂倉・藤島・網倉の各氏が次々にマイクの前に立たれて或いは創立にまつわる話あり、或いはふるきよき山旅の想い出話や現代の登山者への批判など、それぞれに貴重なお話が出た。

参加者の終始なごやかな交歓はなかなか尽きぬながら、最後に、最近アンデス遠征より帰られたエーデルワイスクラブの松田柳子氏、十一月初旬ニュージランドに向かう婦人部親善登山隊の山口節子氏が、拍手のうちに帰朝・出発の挨拶をされ、野田総務委員による閉会の辞をもって、無事記念パーティーを終了した。

今日の参加者 永原輝雄・三田幸夫・神谷 恭・鈴木邦之・中 保・城谷一誠・野田三郎・安彦六郎・三浦義明・広瀬 武・西丸震哉・松永敏郎・関口周也・村井米子・福井正吉・佐藤久一朗・石原憲治・菊地文雄・宮下秀樹・武田満子・広谷光一・吉崎四郎・高橋 満・清水光一・目黒 実・牧野 衛・小林猛臣・遠藤 登・山崎安治・堀川英司郎・松田雄一・牧野四子・吉・牧野文子・川森左智子・小味秀純・進藤波男・日高信六郎・松田柳子・折井健一・岡村治信・武田育子・太田敬・高橋 照・長尾徳夫・浜田一馬・藤島敏男・山下一夫・竹田寛次・都筑

竜・石田稔郎・今井喜美子・坂倉登喜子・秋田しおみ・中河与一・田中正智・小方弘弘・沼倉寛二郎・網倉志朗・大塚博美・細井隆司・隈部忠幸・渡辺公平・岡部浩子・小柳喬史・今井嘉道・斎藤 晋・大西英彦・野萩 守・小野敏之・和地陽二・佐藤佳年・織内信彦・富田美知子・明治大学山岳部・田辺 寿・山口節子・広羽 清・池元善秋・勝田房治・黒石 恒・田村扇一・橋本善世(三八氏未亡人)(松永記)以上八十三名

なお、東京支部では創立二十周年を記念して、洋銀製の文鎮をかねるペーパーナイフを作製しました。型はロックハークンを模して全長14cm、表に日本山岳会のマークを刻み、裏には日本山岳会東京支部二十周年記念と記した立派なものであります。頒価は千円。御希望の向は東京支部宛申し込みください。(以上)

兵庫県岳連隊、ユークン

本会評議員、兵岳連会長津田周二氏を隊長とする登山隊が、来年五・七月にかけて、カナダ・ニューコン地方にある Mt. Lucania (5226 m)、Mt. Steele (5073 m) のその他 4000 m 級の未登峰を目指して出かけることにしている。副隊長は藤田博氏、隊員二名、この隊は神戸市の姉妹都市であるシアトルの「The Mountaineers」山岳会の会員と合同して現地に向うもの

で、米国籍の隊長は Al Randall 隊員が一名、隊員は全部で二五名位の大部隊になる。

総予算は約八七〇万円、登山の他に学術的研究調査が行われるが、その中に Chitina 河水とその周辺の地図作成(二万五千分一)が含まれて、前記に、尚、最近の情報によると、前記を変更して Mt. Bona を中心にするらしい。

☆本会事務所
ルーム当番 予定表☆

15 14 13 12 10 9 8 7 6 5 3 2 1	水 火 月 土 金 木 水 火 月 土 金 木	12 月	水 火 月 土 金 木 水 火 月 土 金 木	11 月
網 関 松 西 野 広 加 鈴 竹 細	倉 口 田 丸 谷 支 藤 木 井 理	竹 小 松 折 鈴 西 沼 松 堀 加 川 網 平 広 村 松 小 竹	内 味 永 井 婦 丸 倉 田 海 外 連 結 委 員 会 堀 三 藤 崎 倉 山 事 谷 木 永 方 田 支 部 役 員 会	竹 内 小 味
松 長 堀 須 小 大	永 尾 川 田 方 塚 辰 川 宮 村 会	平 大 飯 倉 須 部 村 井 野 関 野 松 堀 加 川 網 平 広 村 松 小 竹	山 西 野 知 田 萩 口 尾 塚 沼 下 井 田 野 西	

28 27 26 24 23 22 21 20 19 17 16	水 火 月 土 金 木 水 火 月 土 金
大 飯 当 小 婦 三 折 沼 海 外 連 結 委	以 降 西 野 中 富 部 会 竹 村 戸 井 野
休 倉 野 止 田 内 野	

ルーム日誌(41・9)

9・1日(木) 理事評議員会
7日(水) 東京支部委員会
8日(木) 図書委員会
9日(金) 常務理事会
13日(火) 学生部委員会
14日(水) 学生部委員会
16日(金) 海外連絡委員会
19日(月) 学生部委員会
20日(火) 学生部委員会
21日(水) 三水会
22日(木) 学生部C委員会
28日(水) 婦人部
他に土曜会 3、10、17、24日

お知らせ 東京支部

東京支部二十周年記念事業の一つとして、山の遭難対策についてのシンポジウムを開催いたします。山の遭難について、心理・教育・行政・社会などの見地から、それぞれの学識経験者に討議していただき、遭難対策についての総合的な見解を抽出しようとするものです。振って御参加下さい。

日時 十二月十日(土) 午後二時
場所 青山学院大学六号館

会費の納入をお忘れないう願います。

広い地球の上にも未知の世界が少なくなると、せめて日本人が行ってないところとなる。カナダの Baffin Island もその中の一つ。去年の八月、オタワの鉱山技術調査所地理局部員隊が二十八人で、地形学、水河学、水理学、地質学、植物学といった調査研究を行ったという。(G.J. Sept. 1960)(吉沢)

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金 600 円也
送料 金 120 円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端 2~15, 電話 (943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町 7, 電話 (352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町 1~15, 電話 (731) 7331 (代表)
工場: 大阪工場 (堺市), 東京工場 (戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

Navarro で活躍。約八峰で初登攀をした。

編集後記

☆郵便料が値上りして
会報に際しても、これを
第三種にする。年に四〇万円位は節
約出来るという。背に腹は代えられず
というところいろいろ考えられてい
る。会報という名称もいけないし、会
務報告にも問題があるらしい。なんと
か第三種郵便物に出来るものならし
たものである。
(吉沢一郎)

昭和四十一年十一月十日発行

東京都渋谷区神宮前
三ノ三 外苑コーポ内

発行所

法人 日本山岳会

編集代表

吉沢一郎

頒価五十円

電話 (03) 六五〇一五
直通 (03) 七六五七
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地

あなたのネガから、大型パネル (枠) 張り

お部屋の飾りに! 贈りものに!

あなたのネガから、明快なコントラスト適
切なトリミング (構図) で、大型・美麗・パ
ネル張り写真を製作いたします。

ネガと返送料 150 円同封でご注文下されば
到着後 5 日以内に製作発送いたします。

代金は着品後 10 日以内に送金下されば
結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊
社で負担いたします。また、特にトリミング
をご希望の方はその旨明示して下さい。

但しネガ不調のため作品にご満足頂けない
と思われる場合には、ネガ、代金、返送料と
もそのまま直ちに返送申し上げます。

山岳写真を

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市南区柴田西町 1-16 電話 (611) 7047

■全紙半切	パネル張り	¥ 1,000
■全紙	(新聞 1 ページ大)	¥ 1,500
■全紙 2 倍		¥ 4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご
注文の際は、ご照会下されば別にお見積
り申し上げます。

どこでも歩こう 走ろう体力づくり!!

歩走運動機

ウォーキラン

A型...団体用
B型...家庭用

本機は、自力で動く道路を軽便小型に機能化したもので、
自分の歩走度に応じて、自由に速度が出ます。
スピード・筋力・持久力・体形・モーション・等のトレーニングに最適です。

一仕様一

1. 速度計 (毎分、毎時)
2. 距離計 (小計、合計)
3. ブレーキ調節
4. 斜面角度調節
5. 移動用車輪付

PATENT

使用例

- 歩走トレーニング全般
- 重装備登行
- スキーにおける、ターンモーション
- 体力テスト・動的健康診断
- 美容運動・ウォーキングダンス
- 身障者のリハビリテーション
- 屋内体操場等に……

東京都北区上十条 5 の 36

伸映精機 K K

電話 (911) 8324
(919) 3732